

関東大震災時の朝鮮人虐殺はなぜ起こったか

— 朝鮮独立戦争と日本帝国 —

印 藤 和 寛

はじめに

歴史教科書をめぐる文部科学省のいわゆる「近隣諸国条項」についての昨今の議論をまつまでもなく、1970年代以降教育現場の教職員は、日本人の子どもたちとともに在日朝鮮人の子どもたちを目の前にして、公民教育、東アジアの歴史、日本近現代史の教育について試行錯誤を続けてきた。近年、2001年10月の日韓首脳会談における合意に基づいて、日韓双方の学者・専門家によって2002年に日韓歴史共同研究委員会（第1期）が発足し、古代史、中近世史、近現代史の3つの分科会で共同研究を進め、2005年に報告書を公開、次いで第2期の報告書が2010年3月に公開され、教育にも役立てることができるようになった。しかし、その実態は「歴史対話の難しさを浮き彫りにして終わった」⁽¹⁾とも言われる。他方、民間でも1990年代から努力が続けられ、最近では日本・中国・韓国の歴史学者の共同編集（日中韓三国共通歴史教材委員会）によるテキストも制作されている⁽²⁾。こうした共同研究で、「関東大震災時の朝鮮人虐殺」事件は、韓国側からは問題提起されることがほとんどないが、日本の教育の中では1970年代以降一つの課題であり続けてきた。

本稿では、この「虐殺」の原因についてやや新しい視点を提起することによって、相互の国際的共同研究の前提となる日本の歴史言説分析をさらに深めることを提唱したい。

と言うのも、この問題に限らず、朝鮮に関わることは日本では特有のニュアンスを帯びる、すなわち、1970年代以降、また昨今の韓流ブー

ムの中で大きく改善されてきたとはいえ、日本の歴史言説の中で、隣国朝鮮はとかく無視・過小評価される（反面、朝鮮についての積極的な視点は、すぐに朝鮮側の無闇な「ナショナリズム」のせいとして否定的に扱われることが多い）からである。

例えば、最近の一例として、ベストセラー『東大のディープな日本史』（相澤理著、2012年中経出版、P185以下）、東京大学の入試問題にコメントした次のような記述を見てみよう。

「〔江戸時代〕幕府は通信使を朝貢扱いし、一方では朝鮮は対等な立場であると考えていたので（中略）双方のメンツを立てるため対馬藩は再三にわたって国書の書き換えを行っています。…〈解答例〉朝鮮からは対馬の宗氏、琉球からは薩摩の島津氏を通じて朝貢する使節を受け入れた。」

いわゆる「日本版華夷秩序の形成」や「四つの口」の目新しさがそのまま教科書にも持ち込まれて来た結果、それを単純に受け取ってしまうと、このような誤解が生まれる。教科書に、幕府と朝鮮国王の「対等な関係」と一言書いておけばよいことなのに、それはなぜか省略され、「朝鮮は日本より下」という主観的観念にひきずられる。正しくは次のようであればならない。

「幕府の中には通信使を朝貢と見なそうとする人もおり、朝鮮側には日本を見下す考

え方もあったが、秀吉の侵略後の講和交渉をめぐって対馬藩は再三にわたって国書の書き換えを行い、朝鮮国王と日本国大君(将軍)の間の対等な外交関係が成立した。⁽³⁾

このように、明白に対等な外交関係さえ、日本中心の意識の中であやふやになりがちである。それでは関東大震災当時の朝鮮と日本の関係ではどうだろうか。この問題に関して、表面上の事象についての的確に指摘したものはある。例えば、木村幹『朝鮮半島をどう見るか』(2004年、集英社新書)は、1920年代の日本で「朝鮮人に対する警戒、脅威」の心理がどのようにして生じたかを検討しており、筒井清忠『帝都復興の時代』(2011年、中公叢書)は田山花袋の「外からやってくる敵」、西條八十の「怖ろしい地獄の絵…開けてみてそこがブランク」という言葉を引用して、「関東大震災の廃墟の中で人々が奇妙に戦争の惨禍を想起した」ことを記録している。— 当時の日本で、朝鮮人は警戒、脅威の対象であり、また「外からやってくる敵」「戦争」への恐れが人びとの意識の中にあっただことがわかる。

しかし、そうした意識はどこから生じたのだろうか。実はこれまで、1923年の真相、朝鮮独立運動が1919年の平和的民衆運動の側面を越えて、1920年代初めに具体的にどのような軍事的局面を迎えていたかについて、あまり認識されてこなかった(木村幹も「武装独立闘争はすぐに挫折した」と述べている)。この「朝鮮独立戦争」という観念も存在しなかったことによって、「関東大震災時の朝鮮人虐殺」の原因を考える上で事態⁽⁴⁾の本質に対する認識が不十分であったのではないか、言い換えれば、「虐殺」のきっかけになった流言の「朝鮮人が攻めてくる」という観念が果たしてどこから来たのか、がここで検討されるわけである。そのために

は、朝鮮に対する無視・過小評価に注意しながら、1923年の軍事的局面、「朝鮮独立戦争」の状況を正面から取り上げる必要がある。

(1) 「関東大震災時の朝鮮人虐殺」の原因についての現行教科書記述と定説

「朝鮮独立戦争」と「朝鮮人虐殺」の関係について検討する前に、教科書記述とこれまでの学説について見てみよう。

山川出版社『詳説日本史 改訂版』(2006年検定済、P310)は「関東大震災の混乱」とした囲み記事(本文ではない)で次のように述べる—

「震災と火災の大混乱で、「朝鮮人が暴動をおこした、放火した」との流言がとびかい、政府も戒厳令を公布して軍隊・警察を動員したほか、住民に自警団をつくらせた。関東全域で徹底的な「朝鮮人狩り」がおこなわれ、恐怖心にかられた民衆や一部の官憲によって、数千人の朝鮮人と約200人の中国人が殺害された。亀戸署内では軍隊によって10人の労働運動指導者が殺され、また憲兵によって大杉栄が殺され、社会主義運動は大打撃をこうむった。」

こうした記述の前提には、さきの日韓歴史共同研究委員会でも重責を担った北岡伸一や加藤陽子の見解⁽⁵⁾がある。すなわち—

「東京は無政府状態に陥り、その中で朝鮮人が井戸に毒を入れたなどというデマが広がり、多数の朝鮮人が殺されるという悲劇が起こった…治安維持のために戒厳令が布かれたが、責任を果たすべき警察や軍隊が違法な行動をした。」

「大混乱、無政府状態」が、図らずも「うわさ、

流言、デマ」を生み、「民衆や一部の官憲」による朝鮮人虐殺が行われたというのがその見解である。しかしこれだけでは、なぜ朝鮮人が、という肝心の疑問は解けないのも事実である。

現在大阪市全域で採択されている小学校社会の教科書（『小学生の社会6上 日本の歩み』日本文教出版、2010年検定済、P120）でも、囲み記事の中で次のように記述されている――

「混乱の中で日本に住んでいた朝鮮人や中国人が暴動をおこすというあやまったうわさが流れ、恐怖心などから数千人が殺されるという事件がおきました。この事件は、日本人のあいだにあった、朝鮮や中国の人びとへの差別意識が生み出したものといわれています。」

日本人の中の差別意識について特記しているのが特徴だが、一般的な差別意識がすぐ「虐殺」に結びつくものだろうか、という点で疑問も残る。

そもそも「関東大震災時の朝鮮人虐殺」という事実そのものが、1960年代後半まで日本では一般的に知られることは少く、1970年代まで学校で教えられることもなかった。『現代史資料6 関東大震災と朝鮮人』（みすず書房、1963年）から始まって、現在なお松尾章一によれば「朝鮮人6000名以上、中国人700名以上といわれている虐殺人数は、いずれも被害者側の当時の調査によるもの…虐殺人数を確定する基礎的な研究の重要性をあらためて強調」されるような状況である。また、その原因については「流言蜚語の発生源は…内務省首脳部（とくに水野錬太郎内相）から陸軍への戒厳令発布要請の段階で、「三・一独立運動」の体験などから「朝鮮人暴動」とこの背景に「主義者」が扇動しているという宣伝を口実として戒厳令を引き出し…と私は推測している」⁽⁶⁾とされている。さらに、山田昭

次の最新の成果では、「官民一体の朝鮮人虐殺」については「朝鮮人が殺傷・放火した…という流言がまもなく発生し、一日夜から朝鮮人虐殺が起こり…こうした流言が官民いずれから発生したのかは確証しがたい。…（内務省）警保局長が朝鮮人が暴動を起こしたと認定したのは二日夜だったことを示す」「朝鮮人と日本人社会主義者が暴動を起こしたという流言は官憲から発生したと推定できる根拠はかなり確実に became」⁽⁷⁾とされている。

このように、これまで「関東大震災時の朝鮮人虐殺」の原因として認識されてきたものは、次のように整理できる。軍、警察、自警団による虐殺行為があったことに異論はなく、問題はその出発点になった「うわさ、流言」の出所である。

① 3・1独立運動（1919年）の経験により、官憲は朝鮮人を危険視して、流言を創作した。

② 日本人の差別意識から自然発生的に流言が発生、官憲はそれを広めることにより、利用した。

研究史の上でも、先に述べたように、①はまだ完全に確証されたとは言えず、そうだとすれば②がとりあえずの定説と言える。

こうして、教育現場でも、①国家権力主犯説と②民衆の差別意識主犯説の天秤の中で、「民衆の差別意識」克服や「混乱時の風評被害」への戒めを強調することが行われてきた。それは教育上大切なことである。山田昭次も言うように、仮に①であったとしても、「今度の震災に於て日本人の暴露したような醜い残虐性」（秋田雨雀⁽⁸⁾）を克服することが重要であることに変わりはないし、また逆に②であったとしても、その流言が官憲によって事実として広められ、軍と警察によって虐殺が行われた国家責任は消えることがない。

しかし、こうしたこれまでの「関東大震災時の朝鮮人虐殺」の原因研究では、大日本帝国全

体、特にその軍事状況への視点が欠けている。と言うのも、当時、あたりまえのことだが、日本帝国陸軍参謀本部は、戒厳令下の東京横浜周辺だけを作戦地域としていたのではないからである。

(2) 朝鮮第二次独立戦争（1920～1923年）

ここでは朝鮮独立運動の武装闘争の局面を朝鮮独立戦争と呼び、三次に分けて考える。第一次（1907～1910）は義兵戦争。第二次（1920～1923）は臨時政府北路・西路軍政署大韓義勇隊などのいわゆる「青山里戦闘」を中心とする戦争。第三次（1931～1940）は「東北抗日聯軍」朝鮮人部隊を中心とする戦争。

以下、この朝鮮独立戦争の1923年の局面を明らかにし、次いでそれをもとにして、関東大震災時の朝鮮人虐殺の原因について考えることにする。



(図) 大韓義勇隊の進路および日本帝国陸軍参謀本部の視点から見た朝鮮独立軍の進路⁽⁹⁾

第二次独立戦争について、韓国では周知のこと⁽¹⁰⁾だが、日本では取り上げられることも少ない⁽¹¹⁾。ゆえに、ここでは、西路軍政署を率い、1925年には上海臨時政府の首班（國務領）とな

った李相龍⁽¹²⁾の『石洲遺稿』と朝鮮総督『斎藤實文書』の情報を中心にして概略を記しておく。朝鮮北部国境地域の中国領は、朝鮮で「カンド（間島、壘島）」と呼ばれ、三源浦を中心とする西間島と龍井^{ヨンジョン}を中心とする北間島は移住朝鮮人が多く、独立運動の中心地にもなっていた。

ア) 李相龍と第二次独立戦争

西間島では、既に1919年4月に独立戦争遂行のための軍政府が組織され、李相龍総裁、^{キム・ドンサン}金東三参謀部長、^{チ・チョンチョン}池青天（李青天）司令官が就任、通化県哈泥河の新興武官学校本校の他に七道溝快大帽子と孤山子河東にも分校が設置されて独立軍の養成が進められていた。1919年11月には、激論を経て上海臨時政府の傘下に入り、西路軍政署として改編された。その後白頭山東麓安図県の森林の中に兵営地を設定⁽¹³⁾して、1920年には「大韓義勇隊」（独立軍は、公式にはこう呼ばれた）本部もそこへ密かに移動していたと考えられる。—この年の夏（七月）の西間島三源浦の様子は、ニム・ウェールズ『アリランの歌』の美しくまた一転して残虐な記述で周知のことだろう。15才の主人公^{キム・サン}金山（張志楽）は年齢を理由に独立軍からはずされ、牧師の娘と「一と月近くも、テニスをしたり、湖水で泳いだり、網で魚をとったりして暮した」という一節⁽¹⁴⁾がそれで、彼が上海に去った直後、悲劇が訪れる。10月の間島出兵に伴う日本軍の襲撃に先立って、総督府の指示により1920年8月馬賊が来襲、殺戮が行われたのである。

長江好は部下1500人を率いる満州の馬賊で、日本との関係が深かった。

「長江好は邦人中野清助の仲介にて朝鮮総督府の囑託に依り、大正九年八月頃柳河県三源浦の不逞朝鮮人を襲い、その首魁20余名を捕え、…押収の重要書類を携え朝鮮総督

府に出頭し、将来の行動に協議の上引返し、前記不逞鮮人の首魁20余名を銃殺、…」⁽¹⁵⁾

この馬賊による虐殺に続いて、関東軍の杉山大佐が率いる歩兵第19連隊一個大隊が鉄嶺から、また騎兵第20連隊の主力が公主嶺から出動したのは、二か月後の10月末のことである。日本側の記録によると、この杉山支隊は11月末までに、押送途中で少なくとも81人を「処分」している。それは、「不逞行動事実顯著ニシテ改悛ノ見込ナク」「怨スヘカラサル者ニ係リ真ニ已ムヲ得サル処ナリ」とされている⁽¹⁶⁾。— 捕らえられた朝鮮人は「不逞鮮人」とみなされ日本軍によってこのように「処分」された。

上海臨時政府の史料「墨西哥軍政署督判李啓源報告」の中に、「大韓民国二（1920）年四月以後同三年二月十六日迄ノ間西間島地方ニ於テ日本軍警ノ為メニ射殺サレタル者ノ氏名」34名が記載されている⁽¹⁷⁾。そこには三源浦の韓族会幹部の名が網羅されており、北間島とは違って— 金佐鎮は青山里から北間島に帰還し北へ移動せずに残留した—、ここ西間島では、地元に残留していた指導者層はほぼ全滅した。「朝鮮ニ於テハ国籍法又ハ之ニ類スル法規ノ制定ナキカ故ニ従来ノ例ニ依リ仮令支那側ニ帰化ノ手續ヲ為セルモノト雖一般支那在留鮮人ト同様我カ法権ノ下ニ置クヘキ筋合」⁽¹⁸⁾として、他国への帰化手続き如何に関わらず、朝鮮人はすべて日本国籍を持つ者と見なされ、帝国臣民の反逆容疑者は軍規によって— 犯罪容疑者としての法規に基づく扱いではなく— 即刻処断された。それは国際法に基づく他国との「戦争」ではないが、まさしく「戦争」であった。

李相龍『石洲遺稿』のこの時期の漢詩⁽¹⁹⁾を見れば、「分駐教成隊」が安図県（白頭山東麓）にあっただけでなく、李青天が安図県知事によって「討匪司令」とされており— 従って中国

在留の朝鮮人は中華民国の人として扱われていた—、また「西路軍政署督辦」李相龍自身が三源浦から出撃して安図県に移動していることが分かる。独立軍主力は密かに出撃していた。「金弼、既に囹圄を脱し、再び柳県に入るも、日兵の獲うる所と為り、竟に虐殺さる」の詩もある。一連の詩の最後では10月、「敵兵東西より挟進す。安図県知事、屢（しばしば）我軍に退避を請う。已むを得ずして東崗に移る」と記されている。ここから、当時、独立軍は中国安図県知事の了解の下に、そこを集結地としており、馬賊や関東軍はその留守の間に本拠地を襲撃したことになる。また、日本軍の間島出兵（朝鮮軍・シベリア派遣軍・関東軍合同による総兵力二万の中国領進攻）によって、独立軍は南下して祖国に進攻することを一旦断念し、北方へ退避したことがわかる。もし間島出兵がなかった、あるいは一か月遅れていたならば、安図県には万に近い独立軍が集結し、朝鮮国境を突破して祖国へ進撃していたであろう。

○青山一捷後、我軍散亡して殆ど盡く

青山の捷報耳初めは醒む

一戦能く数百の兵を殲すも

善からざる指揮は司令の責

終に健卒をして散ること星の如からしむ

（青山里戦場で独立軍が日本軍を撃破した後、戦場に勝利した知らせは最初驚きと感動をもたらし、一戦でよく数百の日本軍を撃滅したのであったが、その後司令官の責任に帰すべき指揮の誤りによって、独立軍の兵士たちは散り散りになった。）

○聞くならく、敵魁北京に交渉して十三県自由行軍を許さるるを得、中国自らも三万の兵を出して協より我軍を攻むと

仮道已に愚なるに復た兵を籍る

華人の酣夢幾時にか醒めん

明らかに知る漲溢する韓僑の血

他日横流して北京に入らんことを
(得られた情報によると、日本帝国は中国北京政府と交渉して中国側国境地域十三県での軍事行動の自由を許され、また、中国自体も兵力三万を出動させて協より我が独立軍を攻撃しようとしているとのことである。自国領に外国の日本帝国軍を入らせるだけでも愚かであるのに、また、自国の軍隊をこのような目的に出動させるとは、中国人の甘い目論見は何時破綻することだろう。確実なことは、流れあふれた韓国移民民の血潮が、やがて流れを転じて北京に押し寄せるだろうということである。)⁽²⁰⁾

○敵兵東西より挟進し安図県知事屢(しばしば)

我軍に退避を請う。已むを得ずして暫く東崗に移る

県官敵兵の強きを憂い懼れ

固く軍を移して別処に

蔵(かく)れんことを請う

実力まだ完からず時未だ到らざれば

暫く退きて東崗に向かうを妨げず

(日本軍は東西から挟み撃ちにするように進んできており、安図県の知事からわが独立軍に対して退避するようにと繰り返し要請があった。この状況でやむを得ず、独立軍は東崗に移動したのである。中国の県の長官は日本軍の強さを心配して恐れ、独立軍に対してぜひ別の処に隠れるようにと要請がなされた。独立軍の実力もまだ完全とは言えず、また時機が到来したということもできない点を考慮すれば、しばらく決戦をさけ退避して東崗に向かうこともやむを得ないだろう。)

日本側の公式記録、密偵による報告調査記録を通して、キム・チャジン金佐鎮らの動揺——ホン・ボンド洪範図は即時日本軍への攻撃を主張した——、食糧が不足して絶食を重ねる独立軍、冬の大樹林の中で寒さと飢えの中で次々と行き倒れになった多くの朝鮮人兵士の様子をうかがい知ることができる⁽²¹⁾。

しかし、日本の朝鮮軍司令官の陸軍大臣宛10月25日電報は、次のように述べている。

「我兵出動以来既ニ賊ノ安図方向ニ逃ルルモノ多ク今後討伐ノ進捗ニ伴ヒ之等敗残ノ賊モ亦逐次安図ニ逃避シ該地方ニ於テ勢力ノ恢復ヲ計リ茲ニ再ヒ禍根ヲ扶殖セントスル企図ハ諸種ノ報告ニ依リ明ニシテ将来間島ノミナラス鴨緑江沿岸地方ニモ脅威スルニ至ルヤ必セリ」⁽²²⁾。

このように、日本軍の目には、白頭山東麓で越冬した独立軍が南下して朝鮮に侵攻する危機は依然として続いていた。しかし、現実には、独立軍主力は上記のように、一部は分散し、大部分は北方へ移動したのである。独立軍の祖国侵攻を間一髪で阻止した日本軍の「間島出兵」は、その限りで大きな成果を挙げたと言うことができる。この事態は、日本では、日本軍による朝鮮独立運動根拠地の一方的鎮圧破壊行為と見なされることが多く、韓国でも「庚申慘変」として記憶されてきた。日本は朝鮮植民地失陥の危機、帝国崩壊の危機から、ひとまず脱することができた。当時日本陸軍は上原勇作参謀総長、1915年によく増設が決定した朝鮮軍二個師団19師(羅南)・20師(京城龍山)はかろうじてこの「戦争」に間に合ったのである。

1920年10月から翌年2月まで停刊とされていた「東亜日報」は3月17日次のように報じている。

「[三千人の排日団、太平溝で過激派と連絡、ハバロフスク方面に集結した排日朝鮮人3000名が露国過激派約4万名と連絡して、密山県大甸子地方に軍政署や他の諸団体を召集、一方イマン地方では仮政府の國務総理事李東輝が武器の買入れに奔走している」⁽²³⁾

これらは大韓民国臨時政府の「大韓義勇隊」であり、諸種の文献によれば、同隊参謀部員と

して15名の名前があり、洪範図、安武、徐一、曹昱、李青天、李鏞、蔡英、崔振東らがそこに名を連ねている。

日本側の記録によれば、戦闘は次のように続いていた。

〔偵察中の〕村田中尉ノ一行ハ（11月）九日払曉小綏河南方一里半八家子ニ於テ匪賊ノ襲撃ニ遭ヒ全部戦死〕「北満洲派遣隊命令 一間島方面ヨリ遁走シ来レル匪徒ハ目下金廠及大城廠附近ニ集合シ金廠附近ニハ機関銃ヲ有スル約七百ノ匪徒アルモノノ如シ〕「間島及琿春地方ニ於テ各派不逞団ノ我軍出動ニヨリ露支国境ニ駆逐セラルルヤ、敗残ノ徒ハ悉ク露領水清（スーチャン）地方ニ遁走シ密ニ捲土重来ヲ夢ミ居タル際、我西伯利亞派遣軍ハ翌大正十年ノ解氷期ヲ待ツテ長駆不逞武装団ヲシベリア奥地方ニ圧迫スルニ至レリ。〕⁽²⁴⁾

このように、独立軍と日本軍の戦闘は中国領を北へ移動し、ロシア領——そこでは日本軍と多くの朝鮮人を含む赤軍パルチザン部隊とが戦闘中であつた——に移って続いていく。

イ) 北京の軍事統一会議1921年4月とスヴォボードヌイ（自由市）1921年6月

1921年4月27日、中国北京で国内外十団体の「代表二十余人」が集まって「軍事統一会議」が開催された。各団体の軍事的結合による独立軍の祖国進攻が目指されていた。李相龍は12月20日（旧暦）東崗（樺甸）付近を車（馬車か）で出発、八道河、三家子を経て吉林からは鉄道で、中国服で変装するなど苦心の行路をたどってこれに参加したことが『石洲遺稿』の「燕薊旅遊日記」によってわかる。途中『熱河日記』（朝鮮王朝最高の文章家朴趾源の有名な北京への使節記録）を想起しつつ、北京到着後、申采浩か

ら送られた「天鼓」⁽²⁵⁾を受け取り、その「新大韓」停刊以来の「文章美麗、辞氣激烈」「正直之論」が「此の翁の腦中寸鋼も尚擡げずして、今読者をして氣を増」さしめると言っている。また、届いた書状によって「李青天一行、密山より転じて虎林に至り、北署軍と聯合して共に伊蔓（イマン）の奇に向かう」⁽²⁶⁾ことを知るとある。それによれば、ちょうどこの時、李青天ら西路軍政署軍と徐一らの北路軍政署軍は合同してロシア領、イマンに越境しつつあつた。

同年2月4日の時点でまだ移動行軍中の間島部隊、大韓義勇隊はイマンからさらに北へ移動し、黒竜江の北、ゼーヤ河畔のスヴォボードヌイ（自由市、旧名アレクセーエフスク）の兵営に入った。ここにシベリア各地や北間島で日本軍と戦ってきた朝鮮人武装部隊が集結した。

しかし北京の「軍事統一会議」は、臨時政府大統領李承晩の国際連盟委任統治請願問題などで紛糾を重ね、臨政不信任と新国民代表会議招集を決議して無期停会に入り、政治的統一に失敗した。

6月22日、スヴォボードヌイの兵営にあつた大韓義勇隊に対して、武装解除とロシア側の正規軍である極東共和国政府人民革命軍への編入が指示された。6月27日夜より28日にかけて、これを拒否した部隊と兵営を包囲したロシア側守備隊との間で戦闘となり、その後、いったん武装解除された部隊はイルクーツクの赤軍に編入された。それより先、3月中旬にコミンテルンより派遣されたグルジア人のカラングラシヴィーリが「臨時高麗革命軍政議会議長兼合同民族連隊総司令官」となり、呉夏黙が副司令官に就任した。極東共和国は4月に成立していた。

この事件、韓国で言う「自由市惨変」をロシア側では次のように描いている。

「6月、極東地方の一部とイルクーツクの朝鮮人部隊はスヴァボードヌイに集結し、

極東共和国人民革命軍の正規部隊に改編された。ここに集まった諸部隊は、朝鮮人幹部学校指揮人員の200人、中国中隊の200人、国際共産主義連隊の歩兵900人、トンゴジスキー騎兵連隊の騎兵240人、サハリンスキー朝鮮部落の歩兵1500人などである。エヌ・アー・カランドラシヴィリはこれら全部隊の指揮に当たるとともに、イルクツク朝鮮部隊革命軍事会議の議長を兼ねた。」⁽²⁷⁾

1920年6月22日報知新聞記事を、朝鮮日報が26日「朝鮮内の事態、甚だ重大」と報道しようとして、記事が押収された。その内容は次のようであった。

「政府は次第に朝鮮辺境の不穏事情の一端を公表しましたが、…それは実にその一端にすぎず、事実はさらに重大であって、辺境の事情よりも朝鮮内地の実状は、なお一層重大なものがあり、消息に通ずるものたちは、国民が速やかに覚醒しなければ、朝鮮の国土がわれらの所有ではなくなる日も遠くないと、一致して語っている。」

また、志賀重昂は1921年5月7日の「大亜細亜」掲載の談話で、すみやかに朝鮮の自治を半島人民に公約すべしと主張し、次のように述べている⁽²⁸⁾。

「不逞の空気、全半島に横溢して停止する所を知らず。且つ赤火の火炎は長白山脈を飛超して来たらむとす。帝国百年の深憂大患は実に朝鮮半島にあり。」

この「長白山脈を飛超して来たらむとす」る「赤火の火炎」が具体的に何を指しているかが、今明らかになったわけである。しかも、その「赤

火の火炎」、朝鮮独立軍の朝鮮進撃は、日本国内の社会主義者とも結びつきつつあった。

1922年1月の朝鮮総督府警保局「朝鮮人近況概要」には大杉栄^{リ(イ)トシヲイ}と李東輝（元韓国軍参領、江華鎮衛隊長、上海臨時政府軍務総長、國務総理を歴任し、かつ韓人社会党としてコミンテルンに加盟して上海での共産主義者の中心になっていた⁽²⁹⁾）の関係について、次のように記している。

「大杉栄一派ノ社会主義者ト上海在住共産党鮮人トノ間ヲ関聯セシメタルモ内地在住朝鮮人ノ所為ニシテ即チ在上海元仮政府軍務局長李東輝…大杉ハ同（大正九、1920）年十月窃ニ上海ニ航シ…李増林ハ爾来社会主義者近藤栄蔵、荒畑勝三、山川均、近藤憲二、高津正道、橋浦時雄、堺利彦ト知ル所トナリ大正十年四月ニハ近藤栄蔵ヲ説キ上海ニ密航セシメ…。」

大杉が上海に密航したのはまさしく1920年10月、朝鮮独立戦争と日本の社会主義者はついに結合し始めた。日本の当局者はそれをよく把握していた。

同じく、自由市事件とその後については次のように記している。

「昨年六月黒龍州自由市ニ於テ不逞鮮人団ト露国軍隊ト衝突シ鮮人側ノ殆ト全滅シ…露領「イルクツク」ニハ約二千名ノ不逞鮮人アリテ露国共産党ニ属シ専ラ其ノ指導給養ヲ受ケツツアルヤノ情報アリ此ノ方面ニ於ケル情勢ノ推移ニ付キテハ最モ注意ヲ要スルモノナリ。」

また同2月の「高警第三九七号」には「「イ」市ニ於ケル共産党大会ト不逞鮮人状況」として

「『イルクツク』ニハ朝鮮人士官学校アリテ五千名ノ兵丁アリ…兵丁三十人毎ニ一隊ヲ作り近々鴨緑江滿両江ヲ越ヘテ鮮地侵襲ヲ計画シ居レリ。』⁽³⁰⁾

このように、日本側は自由市事件の後も、人民革命軍と一体となった「朝鮮独立軍」の朝鮮への侵攻を恐れ続けていた。

1922年10月末、沿海州からの日本軍の撤兵、白軍の敗退によって、国境を越えて亡命しようとする白軍敗残兵士と、着の身着のままのいわゆる白系ロシア人たちで、中露国境は惨憺たる状況を呈していた。そして、その後を追うように近づいてくる「朝鮮独立軍」があった。

「赤軍朝鮮及び支那ノ国境ニ接近シ来リ而シテ赤軍ノ先頭ハ鮮人ノ部隊ニシテ既ニ慶興対岸数里ノ“ノウキエフスキー”ニハ約二千ノ赤色鮮人入り込ミ之等共産軍ノ名ヲ以テ国事ヲナシツアル」⁽³¹⁾

「十一月三日支那官憲ノ通報ニ依レハ赤軍已ニ露支国境ニ進出シ…赤軍ノ大部分ハ朝鮮人ニシテ現ニ「ノオキ」ニテハ韓国革命軍ノ名ヲ以テ告示文ヲ貼付シツ、アリ」⁽³²⁾「琿春楊团长ハ赤軍ノ代表ト会見シ白軍ノ追撃越境セサルコトニ協定シタルカ鮮人革命軍ノ行動ハ之ヲ制肘スルノ権能ナシト放言シタリ」⁽³²⁾。

極東共和国人民革命軍、ロシア労農赤軍と一体化した「朝鮮独立軍」は朝鮮国境豆満江対岸に迫った。もちろん、彼らは国境を越えることはなかった。しかし1925年日ソ基本条約締結に到るまで、それは直面する最大の軍事的脅威であり続けたであろう。帝国陸軍による北樺太の保障占領もそのためにこそ必要不可欠であったことが納得できる。1923年関東大震災直後の東京横浜周辺で起こった事態は、このような、当時

の日本帝国、参謀本部が直面していた脅威、進行中の秘かな戦争を前提にしなければ、理解不可能ではないだろうか。日本軍が間島やシベリアで軍規に則って実行した行為、「処分」を、戒厳令下の東京で実行しても何の不思議もない。そうでなければ、「日本人が朝鮮人を恐ろしいと感じるようになった」、また「朝鮮人が攻めてくる」と噂する根拠もわからないままである。

(3) 朝鮮独立戦争と日本帝国

朝鮮独立戦争は、このように実在した——とりわけ当事者である帝国陸軍参謀本部にとっては、現に遂行している宣戦布告なき事実上の戦争として——が、日本国内一般には軍の機密から発するその言説規制に対応して、知られることが少なかった。そのことは、「韓国皇帝からの統治権譲渡」によって朝鮮を支配したと主張する日本帝国から見れば、朝鮮という国がない以上朝鮮人もすべて「帝国臣民」であって、「朝鮮独立戦争」なるものも存在するはずがなく、日本帝国への反逆者、1920年代の日本の言葉で「不逞鮮人」、今で言うテロリストがあっただけだという観念の反映、政治と言説の關係に過ぎないとも言える。朝鮮は日本から見て「国際關係」に入らず、かといって「国内」でもない位置にあつて、日本史教科書でも歴史学者の研究でも、朝鮮は触れずにおくかあるいは単に日本帝国の施策の対象、客体、よくて被害者としてだけ姿を現すことが多かったのである。

ところが、実は日本近代史の概略を見るだけで、朝鮮独立戦争はその背後に浮かび上がる。

第一次独立戦争の直接の結果としての1912年「朝鮮二個師団増設問題」から、陸相上原勇作の単独辞任、西園寺内閣の崩壊、桂内閣の成立と大正政変が始まる。「シベリア出兵」——1920年3月の閣議、外交調査会決定（朝鮮独立軍鎮圧が日本軍単独駐留の目的）⁽³³⁾、3月12日

未明の「尼港事件」の発端、4月4日ウラジオストクの革命派・沿海州政府軍に対しての攻撃開始と翌日の新韓村襲撃⁽³⁴⁾——と「間島出兵」(陸軍参謀総長上原勇作)。この第二次独立戦争にともなって、1923年関東大震災に際し朝鮮人は東京横浜周辺で虐殺され、1920年10月に上海へ密航して李東輝のグループと接触した大杉栄の殺害(「甘粕事件」)も実行される。1931年9月の柳条湖事件に先だって石原莞爾「満蒙問題私見」(1931年6月)は「満蒙ノ価値、政治的価値、朝鮮ノ統治ハ満蒙ヲ我勢力下ニ置クコトニヨリ初メテ安定スヘシ」(言い換えれば、満蒙を支配しない限り朝鮮統治は安定しない)と明言し、石原の言う「安定」は1940年代初頭になっても完全には達成されなかった⁽³⁵⁾。そのことは、中国遼寧省通化市の楊靖宇陵園へ行って楊の遺作「中韓民族聯合起来」(中国韓国両民族はいっしょになって立ち上がれ)の歌詞「還要援助韓国革命定把完成」(またかならず韓国の革命(独立)を援助してなしとげよう)や楯に捧げられた「朝鮮的戦友」の花輪⁽³⁶⁾を見ると理解できる。陸軍参謀本部が固執し続けた「北進」論は、その当初の意図の根幹に朝鮮独立軍の最終的制圧、朝鮮植民地確保による大日本帝国国体の根幹維持があったとも言える。

さらに、1925年男子普通選挙法に先立つ治安維持法の制定、1928年勅令によって(議会の議決を経ることなく)最高刑を死刑にしたことの意味については、これまで既に、日本人に死刑が適用された例がなかった(留置場での拷問による虐殺等はあったとしても)こと、あわせて朝鮮独立運動に対しては多くの死刑適用があったことが注意されてきた。治安維持法がその根幹で標的にしたものが、朝鮮独立運動=共産主義運動であったとも言える。(戦後の連合国軍統治を経て、日本国が独立した直後から現在に至る破壊活動防止法が一貫して主要な標的にし、今日なお在日四世五世代の子どもたちに

さえ加えられる政治的差別、迫害、暴言の数々の意味については、ここでは触れない。)

おわりに

日本では朝鮮との関わりについて概ね過小評価ないし本質が誤解されることが多かった。「朝鮮独立戦争」をめぐる言説編成の当然の結果とも言える。「武装独立闘争はすぐに挫折した」「日本人が朝鮮人を恐ろしいと感じるようになったのは3.1運動が突如勃発したように見えたからだ」⁽³⁷⁾というのが現代最良の日本の朝鮮学者の見解であったし、「金日成キム・イルソンの国家は…捏造された「事実」(=神話)の中から誕生した」⁽³⁸⁾というのが日本での(在日朝鮮人の一部でさえ)常識になる。

こうして従来は取るに足りぬものとされて考慮されることも少なかった1920~1923年の朝鮮独立戦争を正確に復元し、客観的に1923年9月の日本帝国陸軍参謀本部の動向に注意すれば、従来「朝鮮の民族解放運動の高揚に対する官憲の恐怖感が、大震災に直面して朝鮮人暴動の幻想を生み出したのであろう」⁽³⁹⁾と想定されてきたものが、実際には単なる「恐怖感」や「幻想」どころではなく、もっとリアルな軍事的脅威であったことが理解される。こうした1920~1923年の日本帝国が直面した危機——帝国陸軍は朝鮮独立軍と必死に戦い、また対峙しており、1924年1月には戦争の先端は遂に東京皇居前に迫った(義烈団金祉燮による二重橋爆弾事件)——の真相は、軍事機密として秘され、1925年以降は表面上忘れられ、一つ一つの事件は矮小な「不逞鮮人」のテロ行為として記憶されてきたのである。

同様に、韓国では民族主義、反共主義の立場からその全体像をとらえることが困難であったし、また朝鮮民主主義人民共和国でも民族主義はじめ1920年代の朝鮮共産党分派闘争全体が否定的に扱われ、さらにソ連領で共産主義者とし

て生を終えた李東輝、洪範圀らは「社会主義祖国を守る」立場の中で沈黙し、シベリアの朝鮮人はスターリン時代に根こそぎ中央アジアへ移住させられたことはよく知られている。

こうしたことの結果、韓国での認識が「自由市惨変」までで終わることに注意が必要だろう。反共主義と共産主義、朝鮮共産主義運動の党派闘争・上海派とイルクーツク派のちソウル派と火曜会、また30年代抗日武装闘争グループ、南北分断、日文・朝文・中文・露文の言語、日本社会主義運動と日本共産党創設に関わるアナ・ボル対立による分断、相互否定によって、1920～1923年独立戦争の真相発掘は今も困難を極める。

このような困難を乗り越えて1920～1923年の真相を確認し、それによって関東大震災時の朝鮮人虐殺の原因を考えてみよう。帝国陸軍と朝鮮総督府に関わった一部官僚当局者にとって、虐殺は(2日以降は首都に戦争を持ち込んだ「戒厳令」の下で)当然、必然の行動(現に間島やシベリアで行ってきた戦闘行動の続き、法規によらぬ「処分」虐殺の実行)であったこと、しかも「統帥の実はなし」という——考えてみれば恐るべき——状況⁽⁴⁰⁾によって独断専行できたことが理解される。「朝鮮人が攻めてくる」ことを当時リアルに認識できていたのは彼らだけであり、他にそうした観念が発生する場所がどこにもなかった(すべて軍の機密事項であり、一般庶民が最初は知れるはずもなかった)ことを考えれば、そうした流言の出所は自ずと明らかであるようにも見える。また、当時の日本帝国の危機について、最前線でそれを体験した三好達治をはじめ、本稿で紹介した多くの知識人が種々察知していたこと、しかしそれをあからさまに言うことはできなかつたため、そのまま真相が忘れられたことも理解される。

従来は、朝鮮独立戦争への理解不足から、そうした事情が見えなかつた結果として、現在の

日本国の領域を無意識の前提に、その内部にだけ原因を求めてしまっていたことになる。本稿はそうした日本の朝鮮に関わる言説状況を批判的に検討する中で、朝鮮独立戦争の事実を復元し、1923年関東大震災時の朝鮮人虐殺の原因についてやや新しい視点を提示したわけである。

この朝鮮独立戦争と1923年9月の朝鮮人虐殺の因果関係の具体像については、本稿ではまだこうして仮説にとどまっている。今後さらに深い検討を続けていきたい。

(付記) 本稿主要部は2012年東アジア文化交渉学会(2012.5.12、SCIEA2012韓国ソウル高麗大学校)で「申采浩の歴史学と日本」として発表したものの一部です。関連する拙稿(高等学校国語科、公民科、地歴科教材案)「三好達治と朝鮮」<http://kangaerukai.net/155intou.htm>「関東大震災と阪神淡路大震災」<http://kangaerukai.net/sinsai.htm>(ウィキペディア日本「関東大震災」にもリンクがあります)を参照いただければ幸いです。

注

- (1) 毎日新聞2010年3月24日東京朝刊。
- (2) 『未来をひらく歴史——東アジア3国の近現代史』(2005年、2006年第二版高文研)、『新しい東アジアの近現代史』(上下、2012年日本評論社)。
- (3) 田代和生『近世日朝通好貿易史の研究』創文社1981年、P42以下。同書が日経経済図書文化賞を受賞する際の隅谷三喜男の評には「対馬藩を媒介とする日朝の外交関係がいかなる構造をもち、いかに展開されたかを幕府と李王朝との対等な関係と、李王朝に対する対馬藩の朝貢的な関係という二重の関係によって安定的に形成されたとして、説得的に解明」とある(日本経済新聞1981.11.2)。疑問のある人は「柳川一件」以後の両国の「国書」で確かめればよい。「朝

鮮通信使と琉球使節は当初の幕府の位置付けからすればまるで別格で、琉球使節は明確に朝貢使節の格付けなのであって…」池内敏「近世後期における対外観と「国民」」『日本史研究』344号、1991年、P108。

- (4) 2004年横浜市立南吉田小学校で発見された『南吉田第二尋常小学校震災記念綴方帖』10冊には、「朝鮮人が攻めて来る」という噂、「来たら殺せ」と言う巡查、人々によって虐殺される朝鮮人の姿が児童500人余りの作文によって記録されている。後藤周「震災作文に学ぶ 関東大震災における朝鮮人虐殺について」2006.7横浜市人権教育研究会講演、全朝教大阪(考える会)通信「むくげ」188号、2008.4.10。「暴動」「放火」「井戸に毒」などという流言の最初の形が「朝鮮人が攻めてくる」というものであったことがわかる。
- (5) 北岡伸一『日本の近代5政党から軍部へ』中央公論新社1999、P26。加藤陽子『天皇の歴史8昭和天皇と戦争の世紀』講談社、2011でもほぼ同様。
- (6) 松尾章一『関東大震災と戒厳令』吉川弘文館2003年、P55以下、およびP78。
- (7) 山田昭次『関東大震災時の朝鮮人虐殺とその後』創史社2011年、P56。
- (8) 読売新聞、大正12年11月26日。山田前掲書P178。
- (9) 『한구獨立運動史』I, 韓國日報社1987、P232掲載の図(北間島から自由市まで)をもとに筆者改変増補。
- (10) 最初の大韓民国國務總理(1948年)李範奭が1920年北路軍政署の一指揮官として青山里で戦ったことが中文の著書『民族的憤怒』に記されているという(筆者未見)。韓国では青山里戦闘のゆえに北路軍政署獨立軍司令官金佐鎮を中心とする理解が中心で、また民族主義(反共主義)的立場から、

獨立軍は「自由市惨変」で消滅することになり、共産主義者の裏切りが強調される。日本帝国から見れば、民族主義者も共産主義者も同様の「不逞鮮人」。

- (11) 従来の日本における最高の研究は金静美「朝鮮獨立運動史上における1920年10月」『朝鮮民族運動史研究』3号、青丘文庫1986。ただ視点は日本側の動向にやや偏る。姜徳相「資料解説」『現代史資料28』みすず書房、1972も「獨立軍南下の噂」として多少あいまい。間島出兵は北路軍政署だけでも「機関銃等の新武器を有し約六千より成る」(10.25朝鮮軍司令官の陸軍大臣宛電報)獨立軍の祖国進攻を阻止すべくかろうじて間に合い、また1920年10月は欧州で労農赤軍がポーランドを進軍していた「共産主義世界革命」の最高潮期であった、この日本帝国の朝鮮支配失陥の危機の深さに留意すべき。註28も参照。
- (12) 李相龍の簡単な紹介は、姜在彦「李相龍」『朝鮮民族運動史研究』3号、青丘文庫、1986、P230、を参照。
- (13) 申采浩全集年譜によれば、申采浩が尹世復らと間島、白頭山一帯を踏査し高句麗遺跡に強い印象を受けたのは1914年で、それは獨立戦争に向けた根拠地設定のための調査であったという。
- (14) ニム・ウェールズ、キム・サン『アリランの歌』松平い子訳、岩波文庫、1987、P107。
- (15) 『現代史資料28』みすず書房、1972、P x。長江好率いる馬賊団は10月「琿春事件」を引き起こし、2月には朝鮮(日本領)に逃げ込み、中国張作霖側は「日本官憲ト馬賊ト何等カ関係アル」と疑った。朝鮮軍司令部『間島出兵史(上)』、金正柱編『朝鮮統治資料』第2巻、宗高書房、1971、P115。
- (16) 『現代史資料28』P472。

- (17) 『朝鮮民族運動年鑑』(在上海日本総領事館警察部第2課, 1930.4.30押収) 東文社書店(ソウル), 1946, P153。
- (18) 外務大臣より朝鮮総督への照会に対する1916.10.1付回答。『斎藤實文書10』高麗書林(ソウル), 1990, P778。
- (19) 李相龍『石洲遺稿』高麗大學校出版部, 1973, P32。
- (20) しかし実際には、交渉は奉天会議で張作霖巡閱使(督軍)との間で行われ、また「支那軍軍隊ハ本事件間僅ニ東支沿線附近ニ於テ馬賊ノ討伐ヲ行ヒタルニ外不逞鮮人ニ関シテハ殆ント無関心ノ状態ヲ以テ終始セリ」『間島出兵史(上)』P6及びP89。
- (21) 「当分日本軍ノ攻勢ヲ回避」「隱忍自重」「金佐鎮ハ…慰諭シテ後方ニ退却(10.28)」「三々五々解散」「和龍安図両県界ノ山中ニ不逞鮮人ノ餓死セル者…実見セルモノノミニテモ其数六七十七名(11.19)」『現代史資料28』, P250・381等。
- (22) 『現代史資料28』P222。
- (23) 『朝鮮民族運動史研究』3号P191。
- (24) 『現代史資料29』P455, および『西伯利出兵史』第3巻, P768等。
- (25) 「天鼓」は1921年1月創刊でこれはその創刊号だろう。中でも「考古篇」は特に重要で、第一次大戦の原因になった「国粹即Nationalism」を批判しつつ、韓国の「国故研究」はこれまでの成果と言えば「周時経の国語音学一書」のみと言い、「三韓古疆」も「神誌古記」も明確でなく国史も国学も成立していないことを嘆き、「吾輩漫遊者」の境遇にもかわらずここに初めて「僧軍、皐衣仙人」「花郎」新発見の研究が出現する。『改訂版全集』別集P266以下。
- (26) 『石洲遺稿』P290・291。
- (27) 『朝鮮民族運動史研究』3号P126-127, C・A・ツインキンの引用。
- (28) コリア研究所『消された言論政治篇』未來社, 1990, P40・81。『間島出兵史(上)』P109にも「江岸地方不安ノ為一時行政機關ノ運用円滑ナル能ハサリシ」と記されている。ソウルですら商店罷市や官員欠勤が広がる二重権力状態。
- (29) 「上海在留の朝鮮人活動家こそ、コミンテルンと中国共産主義運動との仲介役を務め」「韓中日の代表者で話し合われたのが東洋総局の組織化」山内昭人『初期コミンテルンと在外日本人社会主義者』ミネルバ書房, 2009, P242。
- (30) 『斎藤實文書9』P476・496・539。
- (31) 朝鮮総督発陸軍大臣宛電報1922.11.4『朝鮮民族運動史研究』3号P196。
- (32) 11月3日琿春副領事電報および11月4日間島派遣員電報。『朝鮮統治史料』第7巻P263。
- (33) 1920.3.2閣議, 3.5外交調査会決定に「朝鮮ニ對スルー大脅威」を理由として出兵を継続するとある。原暉之『シベリア出兵』筑摩書房, 1989, P511。菅原佐賀衛『西伯利出兵史要』偕行社, 1925(信行社出版, 1989復刻)には3月中旬決定の「我軍出兵目的の変更」(P160)、また1921年8月下旬開始の大連会議で我国主要条件7項目に「極東共和国領土内に於ける鮮人等の朝鮮統治を乱さんとする不逞行動を防遏する措置を執る事」が含まれる(P184)。
- (34) 『上原勇作日記』(芙蓉書房出版, 2011)「大正九年四月三日土」の項には「浦塩。三日、交渉開始。四日夜十時すぎ衝突。五日朝に完了。」とある。「完了」の意味は、変更された出兵目的に照して興味深い。上原はまた「九月十九日」の項で当時「統帥上の実はなし」という軍統帥の空白状況を記している。上原のグループが後の皇道派の出発点とされ、この状況がやがて軍部独走と天

皇の追認という事態を招くのも、故なしとしない。

- (35) 1939年4月関東軍司令官命令「努力捕殺楊靖宇、XXX（金日成）等匪首。」「昭和十四年度關東軍治安肅正計畫要綱」（關作命第1483號附件），『日本帝國主義侵華檔案資料選編第4卷 東北“大討伐”』，中華書局1991，P236。1939年10月，關東軍第二獨立守備隊司令官野副昌徳少將の指揮の下，総兵力七万五千による「大討伐」が開始され、楊は戦死したが金日成の部隊は生き延びたことは周知の通り。例えば徐大肅の言う「彼は中国軍の下で戦い」（『朝鮮共産主義運動史』金進訳，コリア評論社，1970，P278）も、「国際共産党」中国支部でどの民族も今いる国の支部に属する規定であった点の考慮も必要だし、また中口との関係について申采浩「主旅客族の区別」の現代史への応用だとも言える。
- (36) 1958年「楊靖宇將軍公祭安葬大会」に際して捧げられた花輪には、金日成・崔庸健・金一・金光俠・崔憲の五人の名が肩を並べて
- 記されている。「むくげ」166号，2001.8.30，P104掲載写真（筆者1999年撮影）。
- (37) 木村幹『朝鮮半島をどう見るか』集英社新書，2004，P25。
- (38) 姜尚中「北朝鮮の歴史と今」朝日新聞2012.1.15。和田春樹『金日成と満州抗日戦争』（1992）が挙げられているのだが。
- (39) 例えば『近現代史の中の日本と朝鮮』（東京書籍1991年）P157、山田昭次執筆部分。
- (40) 上原勇作は1915～1923年3月まで長く参謀総長の職にあり（事件当時は河合操参謀総長）、関東戒嚴司令官福田雅太郎は上原の下で次長、第一師団長で震災当初の東京衛戍司令官代理・9月3日以後の東京南部警備司令官石光真臣は上原の腹心であった。また、1921年11月から摂政宮の執政期であったことは言うまでもない。従って、「虐殺の原因」のその背後には、当時の日本帝国最高首脳部の権力割拠状況、国家意志が必ずしも統一されない状態があったことも想定できる。